

目次

第13回大会報告

研究発表・シンポジウム
総会報告
大会を終えて 浅井 幸子
大会発表・参加記 鈴木 康弘・中村 早苗・大石 茜・松本 園子
記録 グニラ・ダールベリさんをお迎えして 太田 素子・榎 瑞希子・小玉 亮子
寄稿1 面白くためになる「愉フォロ会」へのお誘い 宮澤 康人
寄稿2 ニュージーランドの幼児教育 松川由紀子
情報クリップ 国際フレイベル学会（広島2018）開催のご案内 勝山 吉章
新入会員・会員異動 / 寄贈図書 /
機関誌編集委員会・新事務局からのお知らせ

第13回大会報告

2017年12月9日に東京大学（本郷キャンパス）で幼児教育史学会第13回大会が開催され、研究発表・シンポジウム・総会が行われました。大会の詳細は以下の通りです。

研究発表

- 司会：浅野 俊和（中部学院大学）
稲井 智義（北海道教育大学）
1. 小児科医・毛利子来の育児思想 ―世直しと暮らしをつなぐもの―
鈴木 康弘（東京大学大学院・院生）
 2. 1960年代の保育における物語絵本の意義づけ
―文芸研と東京保問研文学部会の主張に着目して―
若林 陽子（東京大学大学院・院生）
 3. 青山学院に存在した二つの幼稚園
―海岸女学校幼稚園・青山学院緑岡幼稚園―
中村 早苗（草苑保育専門学校）
 4. 生活科教科書の教師用指導書における幼児教育に関する記述の変遷 ―幼児教育と小学校教育の接続を図る観点に注目して―
福元真由美（東京学芸大学）
 5. 三田谷啓が促した「母の会」の組織化
―「大阪母の会」「甲陽母の会」「阪南母の会」に着目して―
志村 聡子（立正大学）
 6. 「満洲」における幼児教育とカトリック
―雙葉学園の事例から―
大石 茜（筑波大学大学院・院生）
 7. 珠川善子の保育者養成事業について
―戦後名古屋市における保育者養成と保母の専門職化をめざした人生―
北原 和子
(名古屋市立大学人間文化研究所)

シンポジウム

[東京大学発達保育実践政策学センター
(Cedep) と共催]

テーマ：後近代の保育・幼児教育改革
―スウェーデンのレッジョ・インスピレーション―

提案者：グニラ・ダールベリ（ストックホルム大学）

指定討論者：太田 素子（和光大学）
秋田喜代美（東京大学・Cedep）

司会：榎 瑞希子（聖徳大学）
通訳：平林 祥（ひかり幼稚園）

総 会 報 告

報告事項

第12回大会年度(2016.10.1～2017.9.30)会務報告

小玉事務局長より以下の会務報告がなされた。

- (1) 会員数：2017年11月末現在170名
- (2) 第12回大会：2016年12月10日、千里金蘭大学にて開催。

編集委員会報告

高田編集長より編集委員会報告がなされた。『幼児教育史研究』第12号を2017年11月10日付で発行。編集長：高田理事、副編集長：一見理事。また、投稿要領の変更についても説明がなされた。

J-STAGEへの移行について

浅野担当理事より、J-STAGEへの移行について経過報告がなされた。2018年3月を目途にバックナンバーを公開予定。

会報の発行について

小玉事務局長より、会報の発行について報告がなされた。第23号を2月1日、第24号を6月30日に発行し、その後Web版を学会ホームページ上に公開。担当は勝山理事。

第5期役員選挙開票結果について

小玉事務局長より、第5期役員選挙開票結果について報告がなされた。選挙期間は2017年7月10～31日。送付総数167通(3通未着)、投票総数34通。

新理事：浅井 幸子、浅野 俊和、一見真理子、太田素子、小玉 亮子、高田 文子、梶 瑞希子、福元真由美、村知 稔三、湯川嘉津美

新監査：別府 愛、小山みずえ

理事会における互選の結果、会長は太田理事、副会長は梶理事、事務局長は福元理事に決定。理事会の議を経て、事務局幹事は松島のり子会員に委嘱。

審議事項

第12回大会年度(2016.10.1～2017.9.30)決算

福元会計担当理事より[表1](省略)に基づき説明がなされ、第11回大会年度決算が承認された。

第13回大会年度(2017.10.1～2018.9.30)事業計画

小玉事務局長より以下の説明がなされ、第13回大会年度事業計画が承認された。

- (1) 『幼児教育史研究』第13号の編集

編集長湯川理事、副編集長高田理事。投稿論文の募集は編集規定に従う。大会記録、書評・図書紹介等の掲載内容に関しては、編集長に一任する。

- (2) J-STAGE上での公開について

すべてのバックナンバーを2018年3月に公開予定。担当は浅野理事。

- (3) 会報の発行

第25号(第13回大会報告)を2月頃、第26号(第14回大会案内)を6月頃に発行予定。担当は一見理事。

- (4) 15周年記念事業について

15周年記念事業へ向けたワーキンググループを発足し、随時会員に進捗を報告予定。

- (5) 第14回大会の予定

2018年12月、関西学院大学で開催予定。大会実行委員長は、オムリ慶子会員。

第13回大会年度(2017.10.1～2018.9.30)予算案

福元会計担当理事より[表2](省略)に基づき説明がなされ、第13回大会年度予算が承認された。

その他

第5期会長の太田理事より挨拶があった。続いて第14回大会実行委員長、オムリ会員より挨拶があった。

大会を終えて

大会実行委員長

浅井幸子(東京大学)

幼児教育史学会第13回大会は、12月9日に東京大学で開催され、49名の参加者にお集まりいただきました。うちわけは一般会員43名、院生6名でした。理事のみならずはじめ、ご助力いただいた方々、参加いただいた方々に深く感謝いたします。

午前中の自由研究発表は7件という多数の申し込みがありました。戦前・戦後の保育、幼児教育、育児等について充実した研究発表が行われました。しかし、

運営に問題があったこと、お詫びいたします。これまでの大会で、参加者全員で議論を共有するかたちをとってきた経緯をふまえ、今年度も一部屋で研究発表を行いました。その結果、発表と質疑応答の時間は短くなり、最後の討議の時間もとれず、議論し足りなかったかと思います。また、開始の時間を早めたため、遠方の会員の皆さまにご負担をおかけいたしました。

シンポジウムは「後近代の保育・幼児教育改革—スウェーデンのレッジョ・インスピレーション—」と題し、ストックホルム大学名誉教授のグニラ・ダールベリさんを講演者としてお迎えして、東京大学 Cedep

との共催で開催され、約450名の参加がありました。これまで日本の文脈において、スウェーデンの保育・幼児教育は理想のかたちとして参照されることが多かったように思います。しかしこのシンポジウムでは、ポストモダン、レイトモダン等と表現されるあらゆるものが流動的で不確実な時代の中で、保育の課題を共有し、共同でその課題に取り組んでいくことを目指しました。グニラさんの理論的でありながら実践的な講演と、太田素子会長、秋田喜代美 Cedep センター長の共感的なコメントを通して、これからの保育・幼児教育の姿を模索する基盤を確認できたように思います。総会終了後、山上会館で開催された懇親会には、会員のみならず、グニラさん、Cedep の野澤先生、淀川先生、学生スタッフ、シンポジウム参加者の有志のみならず、そして大学院教育研究科長の小玉

先生にも参加していただきました。翌日は、関連企画である「愉(たの)フォロ合」が開催され、高崎健康福祉大学の富田純喜さんと今井麻美さんに発表いただきました。10名程度の少人数で、ゆったりとした時間配分で、戦後教育史の貴重な証言も飛び出す贅沢な時間となりました。大会の運営において、行き届かなかった点が多々ありましたことをお詫びいたします。とりわけ、会場の関係で、総会の時間が短くなってしまったこと、昼食の時間を十分にとれなかったこと、申し訳なく感じております。それにもかかわらず、スムーズな運営にご協力いただき、どうもありがとうございました。

来年度の第14回大会は、オムリ慶子会員が中心となり、関西学院大学(西宮聖和キャンパス)で開催される予定です。会員のみならずのご協力とご参加をお願いいたします。

大会発表・参加記

大会発表を通じて

鈴木康弘(東京大学大学院・院生)

今回の報告で取り上げた小児科医の毛利子来氏は、2017年10月26日にお亡くなりになられ、その訃報は、さまざまなメディアで報じられた。毛利氏は、1960年代以降、小児科医として数多くの育児書を執筆してきたのみならず、保育運動や障害児教育、母子保健をめぐる問題などのさまざまなテーマの市民運動と関わってきた人物である。そのため、当日は、毛利氏の歩みをどのように取り上げるべきか模索しながらの報告であった。しかし、報告を終えて、休憩時間や懇親会では、生前の毛利子来氏と親交のあったという方、電話で子育てについて相談した方、毛利氏と論争的な立場にあった方、同時代に著作を読んでいた方など、たくさんのお話を伺うことができた。今回の報告で「肝心なことが抜けている」というご指摘・ご批判もいただいた。学会大会が、貴重な歴史の証人たちが集う場となっていることに改めて感銘を受けた。

実は、毛利氏の育児論や保育実践との関わりに注目するようになったのは、2016年度の東京大学大学院教育学研究科の日本教育史演習(担当:小国喜弘教授)の参加者が中心となり、生前の毛利氏と親交の深かった方たちの声をオーラル・ヒストリーとしてまとめる機会を得たことによる。その一部は、東京大学大学院教育学研究科小国ゼミ編『「障害児」の普通学校・普通学級就学運動の証言』(2017年)と題する報告書と

して刊行することができた。この作業を通じて、実践者の語りを残すためのオーラル・ヒストリーや、聞き書きを用いた歴史叙述、それらのアーカイブの整備をどのように進めていくことができるのかなどに関心を持つようになった。それと同時に、毛利氏が、安易に答えを出すことのできない問いについてのさまざまな論争に関わっていたことに気付かされた。

今回の大会参加で、多々ヒントをいただくことができたと同時に、毛利氏が残した文章の行間を少しでも埋めるためできるだけ多くの方にお話を伺い、さまざまな角度から歴史を記録しておかなければと考えるようになった。今後とも、本学会の活動を通じ多くの学びや交流を得ることができれば幸いである。

大会発表と「図書紹介」について

中村早苗(草苑保育専門学校)

2011年10月に入会しました。青山学院女子短期大学での第9回大会は運営委員としてお手伝いをしましたが、今回初めて研究発表をさせていただきました。大学院入学が遅かった上に、博士前期課程修了後、修士論文作成時に通った青山学院資料センターでの年史編纂や資料調査の仕事が楽しく、研究を始めるのも遅くなりました。

今回は青山学院に過去に存在した海岸女学校幼稚園(明治26年創立)と緑岡幼稚園(昭和12年創立)について発表しました。私自身が1980~86年度に現在

の青山学院幼稚園（昭和36年創立）の保育者であったことから、両園とも7年間で閉園を余儀なくされ再開されなかったこと、学院内の年史には記されていてもキリスト教保育の歴史には記録されていないことの原因を知りたかったことが動機です。

特に海岸女学校幼稚園については従来『青山女学院史』の記録に依るしかなかったのが、今回の発表では、毎年夏に行われていた女性宣教師たちの年会の記録という一次史料から開園目的や経緯を明らかにしようと試みました。また、キリスト教保育者養成の歴史を調べることで、なぜ他宗派から保育者を招いたのかの手掛かりを得ることができました。

発表に対して、畠山会員と湯川会員から有意義なご指摘をいただきました。私の場合、史料に語らせてしまい、考察が乏しいことは自覚するところです。本研究が一私立学校の歴史を辿ることに留まらず、日本の幼児教育と保育者養成の歴史に位置付けることが出来るよう、さらに研究を深めなければと励まされた一日となりました。

また大会に先立って刊行された『幼児教育史研究』第12号の「図書紹介」では『青山学院緑岡中等学校の学童集団疎開』を取り上げていただきました。本書出版のきっかけは、2003年、修士論文作成時に資料センターと共同で行った緑岡中等学校の卒業生への資料調査の際に、大島照雄氏が疎開時の日記のコピーを提供してくださったことでした。その後、同名の論文執筆までに10年近い月日が過ぎてしまいました。「なぜもっと早く始めなかったのだろう」と思うのですが、資料センターでの仕事を通して史料や卒業生の方々の出会いがあり、時間が必要でした。私以外の編集委員は、疎開を経験された卒業生の方々です。「急がないと、10年後には僕達は生きていないからね」「あなたの論文では真珠湾攻撃の後、すぐに学童疎開になっている。子どもたちに戦争を伝える本にしたいなら南の島々で起こったことを書かないといけない」等、厳しい指摘をいただきました。また、同書に所収の書簡、学校からのプリント、写真などの貴重な史料の多くは、編集委員に同窓生が託したものであり、皆様のこのようなご協力がなければ出版にこぎつけることはとても出来ませんでした。

ちなみに本書は非売品ですが、学会員のご所属先の図書館から青山学院初等部にリクエストして下されば、お送りすることが可能だそうです。ご希望の際には、ご連絡いただければ幸いです。

第13回大会に参加して

大石 茜（筑波大学大学院・院生）

昨年度、千里金蘭大学での第12回大会に初めて参加し、入会させていただきました。文化研究系の所属のため、学内で幼児教育史を専門とされている方々とお会いすることは全くなく、年に1度の貴重な機会をいただき大変嬉しく思っております。

今大会では、『幼児教育史研究』第12号に掲載させていただいた満鉄（南満州鉄道株式会社）による幼児教育についての論文の続編として、満洲（奉天）のカトリック系幼稚園について発表させていただきました。これまで資料の発掘や証言の収集に時間を割いてきましたが、発表を通して、それらが幼児教育史においてどのような意味をもつのか、どのように幼児教育史を刷新していくことができるのか、もっと俯瞰的な視点で議論を展開していく必要があると強く感じました。戦前の外地という特殊な領域のように感じますが、外地の幼児教育の研究と、皆様の研究との接点をもっと見出していけたらと思っています。

午前の会員の方々の研究発表と午後のシンポジウムを通して、戦前から戦後・現代まで、そして日本だけではなく海外の幼児教育事情という非常に幅広い学びの機会となりました。一言に「幼児教育史」と言っても、その研究内容はとても多様で、まだまだ知らないことがたくさんあり、お聞きしてとても刺激を受けました。個別の事例や年代に閉じこもりがちな歴史研究ですが、こうして視野を広げ、その連続性や断絶を再発見しながら、現代を問いただすことを忘れずにいたいと改めて考えさせられました。

ほとんど知人のいない新参者でしたが、皆様に声をかけていただき、研究の様々なお話ができ、充実した時間でした。こうした繋がりが、今後研究を進めていく上での糧となることと思います。来年度の大会も今から楽しみです。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

大会参加記

松本 園子（白梅学園大学）

学会大会に初めて参加しました。プログラムで、自由研究発表の第一報告で毛利子来が取り上げられるのを知り、これはぜひ聴かなければと思って家を出ました。東大教育学部には何回か行っているのですが、会場は教育学部のちょっと奥、と気軽に考えていたのですが、さすがに東大は広く、赤門から山上会館にたどり着くまでに結構時間がかかってしまいました。で、会場に

はいったときにはすでに、鈴木氏の「小児科医・毛利子来の育児思想」の報告が始まっていた。

毛利は学会の少し前、10月末に87歳で亡くなっていますが、私は1970年代はじめの院生のころ、一番ヶ瀬康子氏が主宰する児童福祉の研究会に参加し、そこでモーリさんに出会っています。ふっくらといつも笑っているような雰囲気、きっと子どもに好かれるだろうなという方でした。そのころ『現代日本小児保健史』を準備中で、研究会の後で原稿の束をまえに一番ヶ瀬氏と出版についての相談をしていた場面覚えています。私にとってのモーリさんは日本の小児保健の歴史を鳥瞰するすごい本の著者としての存在です。そんなわけで、私はモーリさんと彼の実践活動が歴史研究の対象としてどのように扱われるか興味があったのです。

鈴木氏の報告は興味深く聴かせていただきました(はじめの方は、配布資料で補ったのですが)。1970年代、今日につながる子どもと子育ての問題(環境、家族など)が噴出し、それに抗する様々な取組がうまれていて、毛利の「おひさまの会」もその一つといえ

ます。そのこと自体が研究対象として重要であり、今回の報告はその点で面白いものでした。ただ、毛利子来研究であれば、70年代以降の強い意志をもった彼の実践活動の背景として、それ以前の毛利についての検討も必要ではないかと思えます。

他の6報告についてもそれぞれ興味深く、感想や気になることなどあるのですがここではふれません。

自由研究発表の運営全体について言えば、討論の時間が5分では短いと思いました。分科会にして、討論時間を充分にとったほうがいいのではないかと感じました。ただ、今回この参加記を書くために、会報のバックナンバーをみたのですが、そこで自由研究発表は一会場で行うという学会としての方針を知りました。

午後のシンポジウムは東大Cedepとの共催で、とても刺激をうけ、共感しました。ダールベリさんの著書が近く邦訳出版されるということで、ぜひ読みたいと思います。

懇親会は、楽しく、色々な方とお話でき、ダールベリさんともお話しでき、大変有意義でした。大会実行委員会の皆様、充実した大会をありがとうございました。

記 録



グニラ・ダールベリさんをお迎えして

太田 素子 (和光大学)

梶 瑞希子 (聖徳大学)

小玉 亮子 (お茶の水女子大学)

初めに：第13回大会(2017年12月9日)の開催校企画は、スウェーデンからグニラ・ダールベリ博士(ストックホルム大学名誉教授)を招いての国際シンポジウムであった。当学会では、韓国から来日中の研究者を交えてシンポジウムを開催した例(第3回大会)はあったが、海外からの直接の招聘は、今回が初めてである。グニラさんとの交渉・連絡は、シンポジウム共催の東京大学発達保育実践政策学センター(Cedep)にお願ひし、学会としての費用負担、役割分担、成果活用については、浅井大会実行委員長を通じて事前におおまかに取り決めた。12月6日～11日までの滞在期間中のお世話は、太田会長、副会長の梶、小玉事務局長が交代で担当した。以下はその報告である(執筆者名はそれぞれの末尾に記す)。**[梶]**

招聘の経緯：2016年度、太田はスウェーデンに1ヶ月弱滞在した。レッジョ・アプローチをいち早く国家レベルで採用した国を調査し、イタリア以外の文化圏におけるレッジョ理解を知ることが目的だった。

特にストックホルム・プロジェクトの中心になったレッジョ・インスティテュート・ストックホルムと、スカルブネック地方のフォシュコーラ(就学前施設)を訪問することにしていた。その過程で、70年代から長期にわたって、政策立案に従事し、また保育者と共同で実践的な研究を続けたグニラ・ダールベリという人物の影響力の大きさを実感した。思い切ってグニラさんに面会を申し込んでくれたのは、ストック在住の通訳、小林美帆子さんだった。面談は、研究所でほんの1時間くらいだったと思う。グニラさんは「昔から知っている人のように感じた」とその折の印象を語ってくれた。「テーマ保育」と「単元学習」、「対話的保育」と「伝えあい保育」など、両国は共通に理解できる実践や思想の基盤を持っていたと思う。会話の中で「ぜひ日本の保育者と話してみたい」と、自然の成り行きのように来日の機会を作ることになった。**[太田]**

ストックホルムでの打ち合わせ：10月16日、太田会長引率のストックホルム・プロジェクト現地調査に

参加した折に、グニラさんとの面会が叶った。場所はダールベリ氏の事務所。約束の時間に着くと、オフィスビルの前で待っていてくださった。

「ここからの眺望を楽しんでもらいたかったから、こちらにお呼びしたの」と、最上階の大きく窓が開かれたオフィスに案内された。早速、受け入れ態勢とシンポジウム講演資料の締め切り日等をお伝えし、食事制限の有無やご案内先の希望をお尋ねした。話し終わると、「シンポジウムの主題は?」「配当時間は?」と聞いてきた。どうやら Cedep と太田会長のメールは世界中から飛び込んでくる膨大な量のメールに紛れてしまったようで、シンポジウム日程以外の情報は、全く伝わっていなかった。今後の連絡窓口を伝え、持参した英語版東京観光地図・情報誌(空港で入手可)を渡して、お暇した。[梶]

東京滞在記：12月6日(水)：Cedep との共催で招聘できるようになったことは、本当に幸運だった。この日、東大院生の宮本さんが空港まで出迎えてくださった。私と大会実行委員長の浅井幸子さんは、仕事が終わってから夕刻ホテルに挨拶に行き、梶副会長も合流して、自然食のレストランで会食した。「レゾは民主主義のムーブメントだ」という言葉はその折に聞いた。打ち解けた雰囲気の中で日程の概要を話合った。[太田]

7日(木) 午前：お茶の水女子大学附属幼稚園では、上坂元副園長の案内で午前中の保育見学を行い、園庭のお山を登って附属いずみナーサリーに立ち寄った。ナーサリーではグニラ論文を引用した菊池主任保育士の論文を見て喜んだグニラさんからは、英語で論文を書くことで世界に広める意義が熱心に語られた。幼稚園に戻って来てからは、上坂元副園長と梶副会長、小玉と3人で附属幼稚園の実践について意見交換を行なった。グニラさんからは、附属幼稚園では一人一人の丁寧な保育の基本が実現されていることを高く評価するというコメントをもらい、さらに附属における集団での活動についての質問を受けた。短い議論であったが、保育の専門性にかかる議論をすることができた。[小玉]

午後：アートとファッションに触れたいとのご希望だったので、乃木坂にお誘いした。新国立美術館の安藤忠雄展は、各展示室の仕切りパネルが次の展示室への「のぞき窓」のように設置され、観る者を多様な空間体験へと誘っていた。2時間を越えた滞留時間は、「小さな子どものように、次に来るものへの期待でワクワクした」とのことだった。日展鑑賞も予定してい

たが、夕闇が迫ってきたので省略し、東京ミッドタウンへと移動した。ファッション巡りとクリスマスシーズンの光のショーを楽しみ、途中から合流した阿部真美子理事の招待で、火鉢を囲んでの炙り焼き鳥を堪能した。[梶]

8日(金)：経堂にある和光幼稚園に見学に行った。送迎を水野恵子さんをお願いし、討論には里見実氏も参加して頂いた。グニラさんはあらかじめ英語に翻訳して届けてあったプロジェクト活動の記録を読んでこられ、星組の担任の報告も熱心に聞いてコメントされた。絵本作りのプロジェクトについて「子どもたちから100ものお話を引き出しているのはすごい。素子、記録を作ったら?」と促された。この日は和光大学の科研で経費をまかない、和光側からは大瀧三雄、藤田尚子、太田ほか、年長組担当の先生方が研究会に参加された。

また、水野さんの紹介で近くにある「茶々そしがやこうえん保育園」を見学。プロジェクターと壁一面の白板(討論の記録、映像の照射のため)、可動の小さな椅子を備えた特別な部屋に、グニラさんも水野、太田も感嘆の声を上げた。新しい保育を本気で求める意欲が建物に込められていた。別れ際にグニラさんは、日本の幼児教育は「思想や方法に違いがあっても、子どもに対する敏感で受容的な感性は共通していて素晴らしい」と語っていた。[太田]

9日(土)：学会発表会場からシンポジウム会場へ移動すると、すでに Cedep の指揮下に、400名に及ぶという一般参加者を迎える態勢が整っていた。講演配布資料は、東大院生の鈴木・宮本両名の翻訳原稿に関係者の意見を加えて整えてあった。打ち合わせでは、通訳の平林先生を仲立ちとして、ダールベリ博士、太田会長、秋田先生の発言内容の共有を図った。平林先生は、幼稚園の経営に携わっておられる方である。ダールベリ講演の通訳は、現場をよくご存じの方ならではの魅力あるお話しぶり、伝わりやすさであった。[梶]

10日(日)：全くのオフ日として、グニラさんの希望で、原宿、表参道、渋谷の町歩きを大学生の小玉明依がアテンドした。グニラさんは、竹下通りのものすごい混雑を目にしても、Let's go! と果敢に進み、渋谷のスクランブル交差点を感心して見学するなど、東京の雑踏も存分に楽しみ、ホテルに戻られた。[小玉]

11日(月)：午前中は、Cedep 学習会として企画され、学会からは受け入れに携わった4名と OECD Starting Strong の翻訳にもタッチしてきた一見理事が参加した。保育事業の市場への開放が、国際大手企業の参入

とその利益の租税回避という事態を招き、公営に戻したくとも戻せなくなっているというスウェーデン事情と「保育が経済の言葉で語られるようになるにつれ、親（子）はサービスの顧客となった。保育は顧客ではなく、市民を育てるものだったはずなのに」という博

士の憤りが胸に響いた。午後は Beyond Quality の内容に関する質疑応答。帰国便が深夜だったので、太田・浅井のお2人が浅草寺にお誘いし、ライトアップされた五重塔と仲見世の提灯を見ていただいた。華やいだ気分、後楽園でお別れしたとのことである。[楠]

寄稿 1 面白くてためになる「愉フォロ会」へのお誘い

「愉（たの）フォロ会」の正式名称は、「海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会」という長たらしいものです。それを略して「愉フォロ会」といいます。「海外」とありますが、実際はこれまで日本をテーマにした報告のほうが多かったくらいで、現に今年もそうでした。ですからねらいは、「海外」というより「研究動向」の紹介にあります。「海外の」は「内外の」と改めるほうが実情に即しています。出発当初、海外を強調したのは、この学会の前身である「幼児教育史研究会」が西洋専攻のメンバーによって担われていたのに、最近では、外国専攻のとりわけ若い世代の人が激減している、それを何とか修復したい意向が絡んでいました。ご存知の通り、今や世界の情勢は、日本国内に視野を閉ざした歴史研究を無効にしつつあります。日本の現実、世界の動向に共振します。現在の日本の問題は、世界の動向の歴史的な文脈においてしか正しく深く理解できないでしょう。それは、世界中のどの国々でも同じです。今や世界の問題は、いわば「世界史化」しました。

もちろん幼児教育問題もそうです。内向けのはずの日本の幼児教育政策も、世界のグローバル変化の圧力を受けます。見えやすいところでは、韓国や中国や東南アジアの幼児教育の動向に影響されないはずはありません。今大会のスウェーデンからの問題提起も、幼児教育問題の世界史化をあらためて私たちに示してくれました。比較史は、望ましいのではなく、不可欠となるでしょう。実は、かつての「幼児教育史研究会」の先達たちも、西洋をテーマにしながら、現実の日本の課題との比較史を念頭に置いて、研究を進めてきました。日本専門の方も、陰に陽に、比較史的思考に導かれてこそ、優れた研究成果をあげたと、私は見えています。今回の「愉フォロ会」は、いずれも保育者養成の現場でお仕事をされている、若いお二人の報告でした。富田純喜さんの「発達研究の変遷と保育の立ち位置」は「保育において最重要概念の一つ」である発達観に焦点を合わせ、その変遷を、1) 古典的発達観

宮澤 康人（大人と子供の関係史研究会）の批判、2) 関係論的発達観、3) 社会・文化・歴史的アプローチ、という巨視的な歴史的な文脈でとらえたうえで、4) 保育における発達研究、として「発達観の再構築」への展望を開こうとする報告です。そこには、ピアジェ・ワロン論争、ヴィゴツキー評価など、海外での議論も登場します。今井麻美さんの「反発的母子観から見る子育て」は、「子育てという営みを反発的母子観（子別れ）から捉える試み」です。これは博士論文構想の一部分に当たります。「幼稚園入園に際して子別れを経験する親」、に対する「子別れを支える保育者」、という構図の中で「保育者養成課程における Bowlby「アタッチメント理論」の取り扱い」を検討した部分が今回の報告内容です。

どちらも、世界的規模で議論された、重要な論点に関わる歴史の文脈がわかる研究で、個別の言説や事実の検討が、歴史的な文脈の中でこそ意味を持つことを理解させてくれます。富田さんの報告は、発達に遺伝と環境の要因の絡み合いをどう理解するのがいいのか、社会慣行や制度は文化によってどう違いどう共通するか、といった基本的かつ論争的な問題に関連してきます。今井さんのテーマは、アタッチメント理論はなぜ歪められたのか、「3歳児神話」はなぜ強い影響力をもったのか、親と保育者の役割の共通性と差異性について、なぜ誤解が生じやすいのか、それは日本だけのことか世界に共通するか、という謎解きの課題を含んでいます。

この他にも、例えば保育一元化はなぜ実現しないのか、保育士の待遇はなぜよくならないのか、等々、説明や解釈を求める大きな疑問は山ほどあります。大きくない疑問ならもっとあるでしょう。小さくても切実な疑問をまずもつこと、その疑問に、これまでの研究はどのような歴史的解釈をしてきたのか、を問うこと、それが出発点です。つまり、自分のテーマが位置づく幼児教育史の文脈をまず見つけることから研究は始まります。もし、既成の文脈を、どう調べても、どう考えても、<ほんとに全く>見つからなかったとしたら、

それは空前の独創的テーマに違いありません。その文脈を自前で作るしかありません。研究者仲間を納得させる研究発表の最低条件は、根拠づけと意味づけの二つでしょう。提示された事実や言説に、検証された資・史料に基づく根拠があるか否か、その事実や言説に意味を与える歴史的な脈があるか否か、です。研究は、自覚の度合いは様々にせよ、おのずから、論争的文脈か謎解きの形をとるものと思います。それをより自覚して前面に押し出す必要があると思います。「愉(たの

フォロ会)」は、現実が突き付けてくる研究課題とともに、歴史的な脈の発見のヒントを豊富に提供してくれる、と思います。是非、学会大会の一部としてお時間を割き、ご参加ください。お時間の都合のつかない方々のためには、今後「会報」に、個別報告の内容をもう少し詳しく紹介したいと考えています。幼児教育史学会のホームページに記録記事がありますのでそれをご参照ください。(蛇足になりますが、「面白くてためになる」は、かつての講談社の絵本の宣伝文句でした。)

寄稿 2

ニュージーランドの幼児教育

—オークランドとダニーデンの最新事情から—

松川由紀子 (中部大学)

ニュージーランドでは、1989年に幼保一元化され、保育所も教育省の管轄下に入った。この国の幼児教育統計を見て、「幼稚園は伸び悩み、保育所が急増し保育所王国になった」という(日本人の)声をしばしば耳にする。もっともこの国の幼児教育統計では、幼稚園という項目は、各地の任意団体の幼稚園協会管理責任下の幼稚園だけを意味すること、また、保育所という項目はなく、Education and Care Centre(保育センター)の項目の中に保育所は、私設幼稚園や地域型幼稚園等とともに含まれていること、についてはあまり知られていない。つまり、保育所の設置数は、明らかにされていないのである。

はたして、この国の幼児教育事情を、「幼稚園は低迷して保育所王国になった」と単純化してよいのだろうか。地域により事情は異なるのではないだろうか? 特に、この10年間、毎年オークランドとダニーデンに出かけ、主に幼稚園現場の実践を見学させていただき、関係者の声に耳を傾けてきた立場から、ここで、オークランドとダニーデンの幼児教育事情の一端を紹介したい。

(1) オークランドの幼児教育事情

この国最大の都市、オークランドは、移民が増え、多言語・多文化社会へと急速に変化している。

いつも立ち寄るマンゲレ・ブリッジ幼稚園の教師たちも、「特にオークランドの保育センターは多種多彩でそれぞれに異なる」という。ここで注意していただきたいことは、保育センターのカテゴリーの中に、保育所とともにさまざまな私設幼稚園等も含まれていること、そして、そこには無資格のスタッフも少なからず働いていること、である。具体的には、教師主導型の詰め込み教育を実施しているところもあるらしい。

一方、幼児教育統計上の幼稚園、つまり、オークラ

ンド幼稚園協会管理責任下の幼稚園107園についてであるが、この半世紀以上、基本的に自由保育形態が定着している。けれども、自由保育形態を基本としながらも各園で創意工夫することが求められているため、移民家庭への対応、ESD活動や幼小連携、レジャ・エミリアへの関心などから、園によってかなりの特色がみられるという。この点に加えて、幼稚園の保育時間の長時間化も進んでいる。実は、子どもが3歳近くになると、保護者は、保育所から幼稚園へ転園させることを希望するようになり、幼稚園はどこも長いウェイトングリストをもつ。どうも保護者は保育所に満足できないらしく、幼稚園の保育環境、保育内容に魅力を感じているように、すなわち幼保格差に気づいているように思われる。たとえば、この5、6年の間に、マンゲレ・ブリッジ幼稚園の周辺にも次々と保育所が開設され、私も車窓から数か所見せていただいたが、どの保育所も園庭は狭いという感じを受けた。こうしたことから、オークランド幼稚園協会は、全107園において2017年7月から保育時間を1時間延長して、8時半から3時半までの1日7時間、週35時間とすることにした。なお、隣接の南オークランド幼稚園協会は、すでに7時半から5時半までの1日10時間開園を実施している。この長時間保育化は、この国の幼稚園の歴史から見れば、ある意味で自然の流れのように思われる。というのも、この国の幼稚園は、十分な家庭教育を受けられない階層の幼児を対象に無償幼稚園として開始され、第二次世界大戦後に一般化されていったからである。幼児の育つ家庭環境を考慮する姿勢が幼稚園運動の根底にあるのである。ところで、園児の学びの記録、ラーニング・ストーリーについてであるが、かなり現場に定着している様子である。特に幼稚園に

おいては、今や園児や保護者あるいは教師仲間が読んでも楽しめるようなレベルに達しているように思われる。園児の学び、活動の場面も適格な文章と写真で表現する。当然ながらポジティブな言動だけを記している。

以上のようなことから、オークランドでは、幼稚園の増設はみられないものの、幼稚園現場は活気に満ちているといえる。反対に、保育所は量的には増しているとはいえ、保護者の期待に添えてないところもみられるようである。

(2) ダニーデンの幼児教育事情

ダニーデンは、この国の幼稚園運動発祥の地で、オタゴ大学を中心とした小さな大学町である。オタゴ大学は、この国最古の大学として、そして、ダニーデン・スタディと呼ばれる、発達に関する長期縦断研究の拠点としてよく知られている。ダニーデン幼稚園協会には、24の幼稚園の管理責任があるが、今も幼稚園を新設したり、園舎を新築したり、園庭を新しくするなど、幼稚園教育を活発に推進している。2013年に新園舎となったヘレン・ディーム幼稚園は、園舎、園庭ともに広々としている。3、4歳児混合の40名と教師4名、1日6時間、週5日開園の園とは思えないくらい立派なもので、日本からも建築設計者が見学に訪れたという。隣接のダニーデン幼稚園協会の建物も新しくなり、ここで3名の幼児教育プロフェッショナルが事務職員とともに働く。この国では、3、4歳児の場合、週20時間までの保育料は無料だが、ダニーデン幼稚園協会下の幼稚園では、30時間まで無料である。

これは、関係者の熱意と努力の賜物であるが、それを支える市民の理解、協力があるということである。保育形態は、オークランドと同様、自由保育だが、保育内容は工夫されていて、幼小連携を意識して数量や文字に親しむ遊び・活動（幼児版トランプ、すごろくやクッキング等）を用意したり、時にプロジェクト活動へと発展したり、ESDに取り組む一環として栽培活動をしたり、森で半日過ごしたりするなど、園によって特色がみられる。ダニーデンでは、ラーニング・ストーリーが教育省から提案された時、単にそれを模倣するのではなく、教師集団で検討、議論して自分たちのやり方を創り上げていった。その中心には今は亡きリン・フット先生（当時、オタゴ大学教育学部幼児教育学科長）がいらした。「園児の学び方はさまざま。ラーニング・ストーリーは、園児の学びを後押しすることが目的。それゆえにポジティブな面だけを記すことは当然なこと」と、今もリン先生の言葉が甦る。そして、このリン先生が力を注いだのが、オタゴ大学付設保育所の園舎新築で、2014年に完成している。ただ一言、大変にすばらしい（会員各位もオタゴ大学のウェブサイトを開いて確認してください）。

こうしたことから、ダニーデンにおいても幼稚園教育は活発であること、そして、質の高い保育所を求める声も強いことが伝わってくる。

以上、オークランドとダニーデンの現状の一端から、ニュージーランドは「幼稚園が低迷し、保育所王国だ」と単純化することはできないようである。

情報クリップ

国際フレイベル学会（広島2018）開催のお知らせ

2018年9月6日～8日に、広島市内において、日本ペスタロッチー・フレイベル学会が主催する「第8回国際フレイベル学会」が開催されます。同学会には、欧米各地から研究者、教育実践家が参加し、フレイベルや乳幼児教育について熱心な議論が繰り上げられます。同学会では、乳幼児教育の実践家による、フレイベルや教育学理論を基にした実践報告も多く見られます。またヒロシマでの開催ゆえ、平和へのメッセージも主要な議題となっています。

自由研究発表では、口頭発表、ポスター、ワークショップによる発表を受け付けており、英語もしくは日本語で発表することになります。直接フレイベルに関係しなくても、国内外の乳幼児教育に関する報告なら全て受け付けています（2018年4月30日締め切り）。せっかく国内で開催される国際学会ですので、本学会の会員各位の積極的なご参加をお願いします。詳しくは、「国際フレイベル学会」でホームページを検索してください。

勝山吉章（幼児教育史学会前理事、日本ペスタロッチー・フレイベル学会理事）

新入会員・会員異動（2017.7～2018.2）（省略）

寄贈図書（2017.6～2018.1）

- ・藤井常文, 2016, 『戦争孤児と戦後児童保護の歴史：台場、八丈島に「島流し」にされた子どもたち』明石書店
- ・加藤俊二, 2016, 『児童相談所70年の歴史と児童相談：“歴史の希望としての児童”の支援の探究』明石書店

- ・宮里暁美・小林恵子編, 2017, 『松野クララを偲んで』お茶の水女子大学宮里研究室
- ・汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子, 2017, 『日本の保育の歴史: 子ども観と保育の歴史 150 年』萌文書林

機関誌編集委員会からのお知らせ

論文募集について

『幼児教育史研究』第13号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、**2018年5月1日から5月31日まで**に事務局にお送りください(郵便は当日消印有効、宅配便などは必着)。詳細については学会ホームページもしくは**機関誌最新号(12号)掲載の投稿要領**をご確認ください。多くの会員の皆さまからのご投稿をお待ちしております。

新事務局からのお知らせ

1) 事務局が移転いたしました。

2017年12月下旬より3年間、事務局は東京学芸大学内に置かれます。連絡先は奥付、HP掲載の通りです。**投稿論文原稿、寄贈図書など旧事務局にお送りにならないよう、ご注意ください。**

2) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、会費納入状況を確認のうえ、第13回大会年度(2017年10月1日～2018年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方に、お送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。

年会費: 一般会員 7,000 円、特例会員(学生・退職者等) 4,000 円

送金先: 口座番号 00190-9-73668、加入者名 幼児教育史学会

今回は該当の会員にのみ振込用紙を同封していますので、それが入っていない会員は完納状態にあります。なお、2018年1月現在の会費納入状況をもとに請求させていただいております。本状と行き違いでご納入いただきました場合は、何卒ご容赦ください。

3) 「会報」への原稿募集

会報を通じて研究情報の提供と研究者間の交流に努めています。会員研究情報、新入会員の自己紹介(全員にお願いしています)、海外幼児教育情報、幼児教育史研究への提言などをお寄せください。メールまたは郵便でデータ添付のうえ事務局まで(分量は800～3,000字程度)お送りください。年2回の会報発行時までに届いた分を調整の上、随時掲載いたします。次回の会報は2018年6月頃に出る予定です。

4) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、**メールにて事務局までお知らせ**ください。



Web版 幼児教育史学会会報 第25号 2018年2月20日

発行者 幼児教育史学会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 総合教育科学系 福元真由美研究室気付

幼児教育史学会事務局

E-mail: admin@youjikyokushu.org

郵便振替 00190-9-73668

編集 一見真理子

印刷 (株)木元省美堂